幽玄

題字　高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.64
令和4年9月30日

五流大会開催――気を抜かず

会長　**馬場　洋一**

10月8日、やっと開催できそうです。令和2年3月の「五流交流のつどい」を中止してから、実に2年半ぶりに大会を開催できることになりました。

この間に、「つどい」3回、「五流大会」2回の中止がありました。令和2年初めにコロナウイルスが日本に入って以来、今年8月末までに全国で約2000万人が感染し、亡くなられた方は3万7000人を超えました。私たちが経験したことのない「災害」です。最初は得体の知れない恐ろしい新型ウイルスでしたが、ワクチンが開発され、感染経路や予防の研究が進みました。しかし、ウイルスの変異など医学・科学がいまだ追いつかない状況だと言えます。ついに第7波を迎え、再び医療も検査もひっ迫してきて、身近にも感染者が出るようになりました。国は行動制限を設けず、基本的な感染対策を呼び掛けています。社会生活、経済社会との両にらみで難しい判断を迫られていると言えますが、行動制限のないお盆休暇は、コロナ前に近づく観光・交通の予約率、人出などを生み出しました。

このような流れの中で、横浜能楽連盟は第38回「横浜五流能楽大会」の〝開催〟に向けて準備を進めてきました。会場である横浜能楽堂の感染防止ガイドラインに沿った対応を取り、現在でき得る限りの対策を行って、実施する所存です。

しかし、現在の第7波では、今までにないほど日々の感染者が多くなっています。当時過去最大と言われた第6波のピークは約10万人（令和4年2月3日）ですが、その2・5倍もの25万人を記録しています。重症化率は低いとはいえ、大変な数字です。記録を調べると、ピークの1日当たり感染者数は第1波720人（令和2年4月11日）、第2波1605人（同8月20日）、第3波7965人（3年1月8日）、第4波7234人（同5月8日）、第5波2万5995人（同8月20日）です。

我々自身が慣れてしまったのでしょうか。気を抜いてはいけません。会員は高齢者が多く、自らに行動制限を課している方が多いのも事実です。過去の経験を踏まえ、理事会では実施の方向で決議し、担当の宝生流には対応を十分検討していただきました。能楽連盟も厳しい判断を求められるかもしれません。第7波の今後の推移を見つめ、直前の中止も厭わない柔軟性をもって臨むべき時と思います。

この原稿を書いている今は8月下旬。完成した「幽玄」を見所で読めることを祈って、そして何の心配もなく大会を開催でき、皆さんと心置きなくおしゃべりができる世の中が早く戻ってくることを念じつつ、書いています。

もう一つ、能楽連盟に悩ましい問題があります。我々の活動の「聖地」とも言える横浜能楽堂が、令和6年1月から2年半の間全館休館となるそうです。平成8年に開館した能楽堂は25年以上を経過し、大規模改修工事を行うのだそうです。利用できない間、我々は代替施設で大会を実施することになります。その期間に予定されるのは「つどい」3回、「五流大会」2回……、何の因果かコロナ禍での中止と同じ回数です。4年後の五流大会はリニューアルされた能楽堂で、何の制限もなく実施できることを夢見て、足元に気を付けながら、前を向いて進みましょう。

☆お知らせ☆

◎「第38回横浜五流能楽大会」
令和4年10月8日（土）開催予定
会場　横浜能楽堂本舞台／入場無料
五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます
各流派が同一曲を演じる五流競演もあります

◎「第26回五流交流のつどい」
令和5年3月18日（土）開催予定
会場　横浜能楽堂本舞台／入場無料

入会のご案内

横浜能楽連盟では、常時会員を募集しております。会員の方で、同門・同社中にまだ入会されていない方がおられましたら、ぜひ入会をお勧めください。個人でも団体でも受け付けております。入会希望の方は、ホームページまたは事務局へご連絡ください。

連盟事業報告（令和3年度）

副会長 **青山　圭佑**

令和3年度も、憎っくき「新型コロナウイルス感染症」は、第5波に引き続き、変異株により第6波が拡大しました。それにより、連盟の予定した「総会」、「第37回横浜五流能楽大会」、及び「第25回五流交流のつどい」も番組の作成完了後に中止せざるを得ませんでした。

一、定期総会

令和3年4月26日（月）に開催を予定していましたが、会員の委任により理事会にて代行し、議事録は連盟ホームページの「会員専用ページ」に掲載しました。

二、大会の開催

「第37回横浜五流大会」は、令和3年10月23日（土）に開催予定にて、当番流派喜多流により番組まで完成していましたが、コロナ禍にて中止いたしました。令和4年度は担当が宝生流となります。「第25回五流交流のつどい」も、令和4年3月12日（土）に金春流の担当にて開催予定でしたが、やはりコロナ第6波により中止となりました。次回担当流派は観世流梅若会となります。

三、横浜能について

第68回横浜能は、令和2年度からの延期により、令和3年6月5日（土）に喜多流により開催されました。内容については幽玄62号（令和3年9月30日付）にて報告しております。

四、会報について

会報「幽玄」は、第62号を令和3年9月30日付、第63号を令和4年3月31日付にて発行いたしました。

五、会員の動向

令和4年3月31日現在、個人会員は312名（含新入会員12名）、前年度は328名ですので、16名の減少です。団体会員は35団体で、前年度より2団体減少しました。

会員の減少とコロナ禍による大会の中止により、連盟の収支は支出が収入を上回っており、能楽振興積立金（定期預金）の取り崩しが続いております。

学校での能楽体験

観世流 **中村　薫**

今年、文化庁の「子供のための文化芸術鑑賞・体験支援事業」に応募して採択された、県立平塚盲学校と横須賀市立長沢中学校の能楽講座に、私が所属する和謡会が関わることになりました。

平塚盲学校では、2月初旬の本番を前に「能楽講座の事前学習」を1月に行い、当会の有志4名が参加しました。これは本番で行う「羽衣」の予備知識習得のためのもので、高等科の生徒10名に「羽衣」の内容や舞台（地形など）を学校の先生方が説明しました。生徒たちは熱心に耳を傾け、立体地図を指でなぞって観察し、興味津々の面持ちでした。

次は謡の体験です。羽衣のキリ「我三保の～失せにけり」を学校側作成の点字プリントと当方で用意した扇を持ち、一句付けで謡っていきました。みんな実に正確な節回しで、大きな声を出してくれました。その耳の良さ、音程の正確さには感嘆しました。そして最後に私どもの素謡を聞いてもらいました。生徒からは「講師の謡は音階がきれいに揃っていてすごいと思った」との感想があり、先生方からは「本番へ向け大いに役立った」と感謝されました。

本番の能楽講座は、オミクロン株の感染拡大により2月下旬に延期され、シテ方観世喜正師とワキ方安田登師を始め狂言方や囃子方等総勢16名により学内リモートで行われたとのことです。謡や囃子の生の声（音）は聞けなかったものの、受講した生徒たちはその迫力に驚き、興奮冷めやらずの面持ちだったようです。

また長沢中学校では、2月下旬に能と狂言の体験学習が開催されました。能は体育館、狂言は普通教室で行われました。能は坂井音雅師・音隆師と他の方々が舞の実演や実技指導を行いました。能衣装・能面を生徒たちが着ける体験もしました。狂言では、山本泰太郎師たちから歩き方や挨拶の仕方などを教わり、生徒たちは嬉々として学んでいました。当会からは3名が参加し、学校側と連携しながら司会進行や写真撮影などを担当しました。普段接することのない体験に最初は恐る恐るでしたが、やがて「わあ、面白い」となっていった生徒たちの様子に、こちらも新鮮な喜びを感じました。

このような貴重な体験を踏まえて、今後も少しでも多くお手伝いの機会があればと思っております。

▶扇を持ち点字を読みながら謡う

謡曲と私

観世流梅若会 **桑原　弥兵衛**

私の生まれは福井県で、幼少の頃には戦災がありました。また、そのすぐ後の昭和23年には福井地震があり、福井市を中心に大変な被害があったようです。その後南部の方には原子力発電所が多く建設されました。

昔から北陸地方の冬には雪が多く降り積もり、外の仕事はあ

まり出来なかったようで、その当時、青年たちは家の中へ集まっては謡の稽古とか民謡の練習をして過ごしていたのを見たことがあります。

昭和40年代になって、私が結婚する際に、田舎の実家で式を挙げたのですが、式の後、宴会の席になって皆がお酒を酌み交わしている時に、小謡が始まったのです。次々と謡が続き、何人かが一緒に謡って合唱のようになりました。その後私の姪が婚礼を挙げた際も、披露宴で小謡を謡っていた方たちがいました。私の甥の婚礼でも同じように小謡を謡っていたことを思い出します。

私の田舎は謡がとても好きな所なのだとつくづく思います。前述のようなことがあって、私もどうしても謡を習いたいという気持ちが湧いてきました。

その後移り住んだ横浜で、どこか謡を教えてもらえる所がないか探しました。なかなか見つかりませんでしたが、やっと保土ケ谷の峰岡にありました。先生は「曾根先生」です。先生は観世流梅若会と言われました。その時私は、流派のことなどあまり知らず、五流派があることも後になって知りました。

それから本格的に一対一でお稽古が始まったのですが、最初はなかなか難しく、大変な思いをしました。毎週お稽古に通うようになってから1年程過ぎた頃には春の大会がありました。会場は磯子区の宮越舞台（今の久良岐能舞台）で、この舞台は森の中にあってとても閑静な所です。曲目は「橋弁慶」。舞台に上がるのは初めてなので、胸がドキドキして体が上気しているうちに一番が終わり、ホッとした思いでした。

現在練習をしている所は、六角橋にある自治会館です。もう30年余り前から「六謡会」という会として先輩方のおかげで使用させていただいています。今後もしっかり受け継いでいきたいと思っています。

能の師匠・仲間は人生の宝

金春流　**岩村　芳乃**

今から50年前に、高校の同窓生の母親の勧めで横浜にいらした故守屋与四巳師を訪ねたのが、私の能楽との出会いです。初めて師のご自宅にある稽古場でお会いした時、入門を決めました。稽古扇を手にした時の感動は、今も忘れません。

当時私はサラリーガール。職場の同僚や社会人になってから親しくなった友人達を、一人二人三人と誘っては稽古仲間を増やしていき、それはそれは見目麗しいお嬢様達で社中は豪華絢爛な花園のようでした。「うちの社中には華があるでしょう」と、師はよく嬉しそうに話されていたものです。

今の、時間が決められた師匠と一対一の稽古とは違い、当時は先輩や仲間の稽古をしっかりと拝見することができ、それが何よりの学びになりました。

また、すぐに舞台に出演させていただけたことで、舞台の魅力にとりつかれ、春巳会や金春流流友連合謡仕舞会などで、仕舞・舞囃子・演能と、たくさんの番数を経験させていただきました。

師には頭の後ろにも目があるようでした。ご子息の故守屋泰利師に稽古をつけてもらっている間、師はタバコを吸いながら私には背を向けていて、終わると「結構よ」と言います。「何よ、見てもいないのにどうしてわかるのよ?」……師は板の上の空気を感じ取っていたのでしょう。

故守屋与四巳師は、昭和42年に重要無形文化財の保持者になりました。また、終戦前後の数年、誰もが食べることに追われて伝統芸能は存続さえ危うくなった時代に、「それでも弟子たちが懸命に盛り立ててくれた。私は大勢の方に育ててもらったんです」と、勲五等双光旭日章の叙勲時に話されています。この語りを貸してもらえるなら、私、そして稽古仲間は、師の懸命な盛り立てにより成長し、人生の宝物を手に入れたのだと感じています。

残念なことに与四巳師に続き泰利師まで亡くなられ、その後どの師に師事するのか何年も迷って、体は噴火寸前でした。縁あって中村昌弘師に師事することになり、3年前には「猩々」を演能しました。コロナ禍の中で稽古がかなわずにいますが、仲間とは友人として個々のお付き合いをさせていただいています。感謝、そしてありがとう。

敦盛

下懸宝生流　**石川　直弘**

私が謡を習い始めて、かれこれ6年になります。動機は大変不純で、教職を退いてからしばらくしてフリースクールの講師を頼まれた最初の授業の後、声が枯れて喉が痛くなってしまいました。現役の時には考えられないことです。その原因は日常での会話が少なくなり、大きな声を全く出さなくなったからだと思いました。

そこで出会ったのが、下懸宝生流謡曲師範の藤田忠弘先生です。初回から何もわからないまま数人のお弟子さん方に混じって稽古が始まりました。そのとき私は、何よりも藤田先生の謡の声に魅了されました。決して声を張り上げてはいないのですが、エネルギーがギュッと凝縮された響きは体中に染み渡りました。

稽古を始めて、まずは謡本の不可解な記号にびっくり。更に同じ記号でも曲の場面や前後の流れによって、微妙にあるいは大胆に謡い方が違うことに混乱しましたが、結局のところ、記号を参考にして先生の謡い方を真似する以外に方法がないことがわかりました。流派や人による謡い方の違いがほんの少しですがわかってくると、能を鑑賞するときの楽しみがひとつ加わりました。ベルリンフィルが演奏する「運命」が、カラヤンと小澤征爾の指揮では違うのがわかる感じです。能は感情表現を極力抑えた中に万感を込めるという、奥深く難解な芸術だと感じています。私の超未熟なレベルでは、詞に感情を込めると、歌舞伎の台詞のようになってしまいます。

ともかく悪戦苦闘しながら様々な曲を稽古していただく中で、「敦盛」が私に大きな目標を与えてくれました。敦盛との最初の出会いは、私がまだ4、5歳の頃に母が子守唄としてよく歌ってくれた「青葉の笛」です。もちろん、この曲の一番が敦盛で、二番が忠度のことを歌っていることを知ったのはかなり後ですが、幼心に何か感じるものがあったのだと思います。そして半世紀を優に過ぎて、能の敦盛と再会しました。

敦盛を討った直実が出家し、敦盛の霊を弔うと、二人は「仏法の友である」とわかり合い、「あなたはもはや敵ではありません。これからもどうか菩提を弔ってください」と敦盛は消えていきます。直実が戦いの場とはいえ敦盛を討ってしまった辛い思いから敦盛の霊を慰め、敦盛もその気持ちを受け止めて成仏するというストーリーに何か癒しを感じ、この曲を大切に謡っていこうと決めました。「青葉の笛」と共に私の心の友として、これからも「敦盛」と付き合っていこうと思います。

能楽堂だより　令和4年10月～5年3月の公演案内

令和4年10月から5年3月までの横浜能楽堂公演予定は次の通りです。ぜひお運びください。

特別公演
11月6日（日）午後2時開演
狂言「花争」（大蔵流）山本則光
能「昭君」（金剛流）金剛永謹
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売中

普及公演「眠くならずに楽しめる能の名曲」
12月25日（日）午後2時開演
狂言「茶子味梅」（和泉流）野村万蔵
能「楊貴妃　玉簾」（喜多流）佐々木多門
S席四千五百円／A席四千円／B席三千五百円
▽チケット発売中

企画公演「能役者　鵜澤久」
2月5日（日）午後2時開演
舞囃子「智恵子抄」（観世流）鵜澤　光
能「卒都婆小町」（観世流）鵜澤　久
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売…11月12日（土）正午から

普及公演「バリアフリー能」
3月21日（火・祝）午後2時開演
狂言「首引」（和泉流）野村萬斎
能「熊坂」（宝生流）水上　優
S席四千五百円／A席四千円／B席三千五百円
介助者1名無料
▽チケット発売…1月14日（土）正午から

※窓口販売はチケット発売翌日からとなります。
横浜能楽堂☎045（263）3055

※毎月第2日曜日には**普及公演「横浜狂言堂」**を開催。狂言2番を解説付きでお送りします。
全席指定二千二百円

※今後の新型コロナウイルスの感染状況や政府方針によっては、日程・内容等が変更になる場合がございます。最新の情報は、横浜能楽堂ホームページをご確認ください。

横浜能楽堂長期休館のお知らせ

平成8（1996）年に開館して25年以上を経た横浜能楽堂は、このたび、初めての大規模改修工事を行うことになりました。工事のため令和6（2024）年1月から令和8年6月頃までの約2年6か月間、全館休館いたします。

施設利用は、令和5年12月28日（木）までの予約は通常どおり受け付けます。また再開館後の施設予約につきましては、詳細が決まりましたらお知らせいたします。

休館予定期間　令和6（2024）年1月～令和8（2026）年6月（予定）

◆編集後記◆

コロナウイルスは相変わらず感染者数が高止まりのままですが、オミクロン株は症状が軽く重症化しにくいこと、国からの行動制限もないことなどから、イベントや行事は少しずつ以前の状態に戻りつつあり、外出する機会も増えてきています。周りにも感染者が出ていますが、いずれも症状は軽いようです。当連盟は、会員に高齢者が多いため、かなり慎重な姿勢を取らざるを得ませんでしたが、今回の五流大会はなんとか実現することができそうです。

しかし、夏から秋にかけて台風・大雨・地震など、昨今の異常気象にも油断はできません。円安など経済状況も悪く、心穏やかに謡を楽しむようになるには、まだまだ時間がかかると思われます。　（F・Y）

横浜能楽連盟連絡先
◎事務局　倉藤
TEL
〇四五－八三五－二三六一

◎連盟後援行事

「第38回横浜かもんやま能」（観世流「通小町」他）10月2日（日）横浜能楽堂本舞台（有料）